

動物は友達であり、食べ物ではない

古いクリー族の教えに、こんなものがある。人々は気軽にヘラジカを狩らない。ヘラジカは本当の必要がある時にのみ、人々に身を捧げる。この物語は単なる伝説以上のもの——それは指導だ。動物は我々が自由を取るためのものではないと教えてくれる。彼らは我々の親族だ。彼らが命を捧げる時、それは贈り物だ。そして贈り物には感謝、謙虚さ、そして自制が求められる。

人類の歴史はかつてこれを理解していた。数世紀にわたり、肉は毎日の権利ではなかった。人々が農耕生活に落ち着いた後、動物は生き延びるための仲間だった。彼らは乳、卵、労働力を提供した。彼らの命は、最も厳しい冬や、コミュニティが祝宴を必要とするまれな祝い事を除いて、守られた。肉は希少で、だからこそ神聖だった。それを食べることは、犠牲の重みを尊重することだった。

しかし、私たちは道を外れた。富が増すにつれて、肉は変わった。それは地位の象徴、商品、権力を誇示する方法となった。もはや希少ではなく、日常的なものになった。それでも、反対の声は常にあった。ヨーロッパのルネサンスの絶頂期でさえ、レオナルド・ダ・ヴィンチは自分の体を「動物の死体の墓」にしないと宣言した。彼の拒絶は単なる奇行ではなかった。それは道徳的な立場だった。彼は他の人が無視したものを見た。軽々しく奪われた命は、尊敬されない命だ。

他の伝統もこの真実を伝えてきた。仏教は、人の行動の中心に慈悲を置いた——人間だけでなく、すべての意識ある存在に対して。動物を食べることは、苦しみを広げ、自分をより深く害に結びつけることだ。控えることは、「アヒムサー」、行動における非暴力を実践することだ。この教えはクリー族の物語と共鳴する。命は決して軽々しく奪ってはならない。

現代社会はこの知恵をほとんど放棄してしまった。大恐慌や第二次世界大戦中、人々は再び肉を貴重なもの、配給され、決して無駄にされないものとして扱った。しかし、戦争が終わると、飢えは豊かさにとって代われ、自制は贅沢に道を譲った。肉の消費は急増した。料理は重くなり、経済は工業化し、動物は最後の尊厳の欠片を失った。彼らはもはや「自らを捧げる」ことはなかった。彼らは製造され、増やされ、想像を絶する規模で屠殺された。

契約は破られた。尊敬は溶け去った。人間と動物の絆は搾取へと崩れ落ちた。

これが私が菜食主義者である理由だ。それは流行やファッションではない。それは倫理についてだ。クリー族の長老、ルネサンスの芸術家、仏教の僧侶が思い出させる声——動物は商品ではなく仲間だと——に耳を傾けることだ。命を奪う必要がないなら、私はそれを拒む。私の体は墓にはならない。

動物は友達であり、食べ物ではない。この真実に基づいて生きることは、失われた尊敬を取り戻すことだ。それは我々の前にいた者たちの知恵を称えることだ。それは苦しみの上に築かれ

た産業を拒絶することだ。そして、それはヘラジカがまだ自由に歩き、その贈り物がまれで神聖であり、日常的で虐待されない未来を支持することだ。